

第22期 宮本清志

本来なら22期の3年生の時の様子を試合結果を交えて書かなければならぬだろうがもう30年前のこと、自分自身のことは断片的に語れても部全体ともなるとはつきり言って記憶も薄れてしまっている。そこで、主観的になってしまうかもしれないが、私たちの世代のラグビー部という視点で語りたいと思う。

私たちは、昭和22年と23年生まれ、昭和38年東京オリンピックの前の年に千歳高校に入学した。私たちの入学した年に、新宿京王デパートができ、京王線の新宿駅が地下にもぐった。

私たちの世代をいわゆる団塊の世代、小学校からやたら人数が多い世代ではあったが、回りで騒ぐほど私たちは気にしていなかったのではなかろうか。何しろ生まれた時からそうだったのだから。

千歳高校合格発表の日、東京は記録的な大雪に見舞われた。私は入学式の記憶はほとんどない。しかし、グラウンドでのラグビー部の練習を見た時、何か輝いていたような気がする。それが私のラグビー部との出会いであった。

私はその時、体重42kgとても、自分がラグビーなどやれるとは思っていなかった。

そんな4月の放課後、私が教室の掃除をしている所へ18期の平井さんが入って来て私たちにラグビー部に入らないかと誘ったのである。平井さんはもう卒業しておりラグビー部のコーチをしていたのだった。ラグビー

部に入りたての頃、練習日は週4回だと聞いていたがだんだん休みが少なくなり週5回になってしまった。

さすが、千歳高校ラグビー部練習はきつく、当初入部した15名近くの私たちの仲間も1年が終わる頃には以下のメンバーになってしまった。

●湯澤達雄:色が黒いが18期の兄貴は主将だったというだけあって、パス、キック共に新入部員離れしていた。勿論、女の子にもてた。ポジションは10番。

●金子明:なぜか、金回りが良く練習の終わったあと、高校のそばの中華そば屋でタンメンをおごってもらった。パワーはあった。ポジションは8番。

●小嶋成夫:美術は得意だが数学が苦手、私たちの仲間でも最初に赤点を取り部活停止となり、さびしそうに?我々の練習を見ていた。ポジションは5番。

●駒谷行雄:練習中苦しうに腰に手を当て体をねじっていた様子が今も思い出される。一時ハーフもやっていた。当時はやったハイ!ポーラを英語で歌っていた。ポジションは2番。

●折田克己:むーん、口数は少ないがボールをつかむと人が変わる。フロントローの典型的?タイプ。彼の学園祭の時作った宮沢賢治の詩をもじった雨にも負けずのラグビー版は好評だった。ポジションは勿論3番。

●小野政治:我々の中で一人だけバイクで通学、ラグビー部員のくせに?色白で昼休みに皆でちよつとずつ飲んだ梅酒で顔が真っ赤になり授業にでられなくなった。

ポジションは6番。

●宮本清志:なぜか、先輩にかわいがられるがラグビーは下手、ノックンをする度にフォワードから睨まれ、3年の時はタッチジャッジで活躍した。ポジションは14番。

今、私の人生の中で千歳高校ラグビー部での3年間は私自身の宝物となっている。ラグビーを通じ、それをやっていたと言うだけでラグビーをやっている人、やっていた人と何か相通じ合う物を感じ、意気投合できる。ラグビーはそんなスポーツだと思う。そして千歳高校を卒業し30年、卒業してからは、団塊の世代特有の競争のリングへとお互い戻ってしまった。近頃やっとノーサイドの精神でお互い生きてきた人生を讃え合い、肩を抱き合い、お互いのポジションを素直に認められるようになったのではなかろうか。

そして最後に、ラグビー部を途中でやめたり、ラグビー部に関係していて、今も交流している仲間も紹介したい。

●田辺大輔:我々のカラーが体育系にならなかったのは彼の影響か……。

●谷口日吉:調子が良さそうだが、時折見せる真剣な眼差し、それが真実……。

●守屋美智男:我々ラグビー部の応援団長、最後にゃ試合にも出たっけ……。

以上3名これからも宜しく。